



(號十九百二第)

國民思想涵養講習會	其他
統一俳句發表	子爵 清岡長言選
和歌課題「夜路」發表	主任 松尾鼓城
デモクラシーと佛教と國體	主任 山根青村
機微譚語	八二 鬚髯の美談 八三 本尊の選擇
國體とデモクラシー	海軍大學 校長 佐藤鐵太郎
日蓮聖人教義綱要	僧正 井村日咸
聖德太子の憲法	大僧正 本多日生
釋尊中心の佛教	一 記者

所輯編一統町前山白川石小京東 所取扱務事行發
 ▶ 番三三五三三京東座口替振 ◀

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
 大正八年四月十五日發行(毎月一週十五日發行)

覽天賜

大僧正 本多日生師撰述

大藏經要義

文學博士 井上哲次郎先生叙
 海軍中將 佐藤鐵太郎閣下序
 文學博士 姉崎正治先生論文

全部 十八卷
 菊版洋裝上製
 三方金線函入
 每册四百頁以上
 改正定價各册
 金貳圓四拾錢
 送料各十二錢
 既刊 自一卷至十卷

東京博文館
 本町

刊新—卷十第

本書は大藏經中重要なる經典約壹千餘卷を撰出して其の組織と綱要とを簡明平易に講述し、且要文を訓譯して詳解を附し、醇乎たる宗教的の妙旨、周到なる道德的の教義、深遠なる哲學的の真理、微妙なる人生訓を闡明し來つて一般人をして浩瀚なる一切經の要義を公正に會得せしめんとする空前の大著也。大藏經は佛教各宗の源流にて復是東洋文明の最高權威たるは論なき所、今や新文明の創建に進むに當り歴史的思想の傳統を踏観するの必要に迫れるの時に大著に接す。心ある國人は舉つて本書の出現を歡迎すべきなり。(大正六年)

既刊目次 昨年七、八月本誌廣告に掲ぐ

- 日蓮主義綱要 本多大僧正著 定價壹圓六拾錢 送料八錢
- 日蓮聖人正傳 本多大僧正著 定價壹圓六拾錢 送料八錢
- 高山樗牛と日蓮上人 姉崎文學博士編 正價壹圓五拾錢 送料八錢
- 淫祠と邪神 和田文學士著 正價壹圓 送料八錢

▲本誌事務取扱所東京市小石川區白山前町統一編輯所(▲本誌定價一册發行所東京市淺草區北清島町十四番地編輯兼發行人松尾英四郎△印刷人鈴木日雄)十錢郵稅五厘▼

尺五絹本米點山水

(吉田鼓堂氏藏)

王 山 筆



尺五絹本淡彩山水

(山根僧正藏)

王 山 筆



釋尊中心の佛教

(四月七日統一閣に於ける釋尊降誕會衆に對する講話要旨 松尾生)

佛教徒が釋迦牟尼如來を中心として信仰至誠を捧ぐべき所以は、大要六個の理由を有て居る。(一)には此の國土有縁の佛なるが故に、(二)には久遠實成の佛、即ち無始無終の本佛なるが故に、(三)には三界の所有者、即ち最尊主なるが故に、(四)には全世界の人衆の救済主、即ち無量無邊の智慧力、乃至法藏の本師なるが故に、(五)には一切人衆の父母にして慈悲甚深なるが故に、(六)には總ての力用活動を有して功德の最善を盡し給ふ故である。この以外にも考へれば未だ讚歎すべきものは有るであらうが、大體以上でも釋尊の中尊本佛として信仰すべき質實は充分である。此に於て他土の阿彌陀、藥師、大日等の諸佛の信賴するに及ばざる所以、十却、百却、千却の始成小覺者の信賴するに足らざる所以、各土割據の權迹佛、即ち水影的な、釋尊から見れば所從の微力なる分身佛の信賴するに足らざる所以、救済力の有限にして信賴するに足らざる所以、従つて慈悲力用の限度にして信賴するに足らざる所以が明瞭になるのである。

釋迦佛は全世界に親たる佛である、全世界の我等は釋尊の愛子たる事が解つたなら、何を苦んで慈父悲母を離れ無縁の他佛に迷ふて一乘の外に彷徨せんとするのである耶。佛教徒たるものたゞ合掌南無釋迦牟尼佛と讚仰する外はないではない乎。

聖德太子の憲法

本多 日生

本文は二月二十日淺野造船所に於ける師の講話の概要なり、未だ校閲を経ざるものにして且つ職工を對向として演説せられたるものなり

(一) 太子の憲法は我邦文明の源泉

憲法とは何ぞや、曰く萬世に亘り容易に變更すべからざる重要な法則を云ふ而して現行帝國憲法は今を去る約三十年前即ち明治二十一年紀元節を以て發布せられたるものにして、世界に冠絶せる不磨の大典なり。然れども今茲に説かんとするは約一千三百年以前推古天皇の朝に於て聖德太子の制定せられたる憲法なり現行憲法は主として國家の法的關係を規定し、道德との交渉殆んど絶無なるに反し、聖德太子の憲法は重に國民一般に必要なる道德的法則を明示するを其目的とす。政治と道德とは文明の基礎なるを以て、其一方に偏せんか國家の隆盛は期すべからざるなり。

世を擧げて權利義務の觀念に心酔し、道德の何たるを顧みざるにあり。然れども親子兄弟又は朋友間に於て單に權利と義務とをのみ標準として萬事を解決せんか人生は非常に冷淡苛酷に陥り到底温情裡に生活する能はざるに至らん。聖德太子が此點に着眼して道德的憲法を制定せられたるは實に達見なりと云ふべし。聖德太子の憲法は我邦一千三百年の文明湧出の源泉なり。抑我邦古來の文明は西洋各國に比して遜色あるものにあらず、而して之を立證するは實に聖德太子の憲法なりとす。凡そ大國民たるものは自國の文明を誇るの勇氣なかるべからず、從て我邦文明を外國に對して誇るには聖德太子の憲法を以てするに若くはなし、蓋此憲法は我邦古來の文明を代表するものなればなり。

(二) 此に偉大なる外國に對抗すべき文明あり

凡そ權利義務のみを以て萬事を律せんとするは、小量偏狹の結果なり。今次の平和會議に於て我邦の主張せんとするは人種的差別待遇撤廢なりとす。從來米國に於ては日本人に對して自國人と同一待遇を與へず、然れども同一文明を有する人種に對して同一待遇を與へざるべからざるは動すべからざる常理なり。牧野男爵は講和會議に於て已に此意見を發表したるも、他に種々複雑なる關係を有するを以て相當の時期に於て之を實行することとなれり。斯くの如き大問題に向て力爭奮闘するは大丈夫の快事ならずや、彼の資本家と労働者と蝸牛角上の争に汲々として外界の輕侮を恥ぢざるは畢竟小量偏狹の致す所にして、小事に怒らず大事に怒るは眞の文明人なり。而して一國が外國の侮を受くるは、畢竟國情野蠻にして外國に對抗すべき文明を有せざるによる。故に日本人たるものは一千三百

年の久しきに亘り我邦の文明を支配せる聖德太子の憲法の概要に通じ、以て我邦文明の偉大なるを世界に向て誇らざるべからず。

(三) 憲法の要點

次に聖德太子の憲法の要點を説述すべし。

一、相輯睦すること

人生は平和を正道とし争闘を權道とす故に長、短を呑み強、弱を食むは野蠻の極致にして長短相補ひ強、弱相輔くるを文明の精髓とす、故に人は相輯睦和親せざるべからず。

二、上司に聽従すること

社會の安寧を保障するには秩序なかるべからず、人にして秩序を守らざらんか虎狼の世となるべし。故に人は上司の命に聽従せざるべからず而して我國に於ける秩序の源は皇室にして詔勅は正義の發露なれば精神的服従の誠意を表明せざるべからず。

三、禮義を守ること

古語に曰く禮は體なりと、蓋禮は人情

の和ぐ所以にして、文明は其源を禮に發す、故に人は寒暑を述べ贈答を守らざるべからず。

四、公平無私なること

裁判仲裁、其他正邪善惡を斷ずるに當ては、天真爛漫、虚心坦懐なるべし、苟も親疎の故を以て其斷を二三にする勿れ

五、人の善を賞せよ

世に人を讃るを以て能事となすものあり、今や人情輕薄、學生其師に諱名を附し、密に相譏りて快となす、互に相譏り交々相罵り、世を擧げて滔々底止する所を知らざらんとす。即ち知る罵詈謗は文明の破壊なることを。

凡そ上、下を愛し、下、上を敬す、相賞し相賛し、和樂歡聲に滿つ、殊に我邦に於ては皇室の萬民を愛撫せらるること恰も親の子に對するが如し、是れ我邦の今日ある所以なり、殊に明治天皇の御代に至りては國民の忠君愛國的精神は一層發達して大軍人大學者の輩出古今に絶せり。蓋明治天皇の徳徳茲に至らしめたる者なり。故に日本人は明治天皇の高恩を感謝し以て皇室を尊敬せざるべからず。

六、職業に忠實なるべきこと

凡そ人は自己の職業に忠實ならざるべからず、其職に忠實ならずんば懶惰の心起る、歐洲大戦中實業界の活況に伴ひ、從業者の賃金暴騰するや缺勤者非常に多く、操業上の能率却て減少せりと云ふ、是れ責任を自覺せざる結果なり、人苟も職業に従事するに當ては誠心誠意渾身の勇氣を以て之に當らざるべからず。

七、操業に際しては熱心以て之に當るべし

労働時間の長短は能率上の問題にあらず、假に一日の労働時間十時間を八時間に減少するも、非常なる熱心を以て之に當らば其成績は却て良好なるべし、會社にして利益なからんか其従業員を優遇する能はざるを以て熱心業務に従事し能率増進を計るべし。(次回に完結)

●開目鈔詳解上卷

本多日生師選述
菊版二七四頁定價貳圓送費八錢
統一編輯所にて取次

ども、子供は未だ遊戯に夢中に爲つて居つて出て来ない

諸子知ること無ければ、父の誨へ聞くと雖も、猶故樂著して嬉戯すること曰ます

一は現在生活の厭ふべき怖るべきものなるを知るも、自己の本性を意識せざるが爲めに卑屈の

見に墮ちて厭世の思想に囚れたるものである、此二は共に佛敎を誤解して居るものである

國體とデモクラシー

佐藤鐵太郎

左は我佐藤閣下が世人が新思想として取扱へるデモクラシーに對し解剖批判を試み併せて我國體の嚴立を宣明し以て同僚間に示されたるもの也、曩に統一閣に於ける國民思想講演會に於ける講演も亦此意に外ならざりき

今や我帝國國民は一大覺醒を起すべき時機に遭遇せり、外來の低級なる思想は不注意にして新奇を好む國民の頭腦を惑亂せしめ青年等の感情的動作は彌々思想の趨勢を險惡ならしむ、ことに我等海軍々人の注意すべきは由來海軍々人の思想の動もすれば急激に流れ易きありこれ一には常に世間に在るが故に煽動に應じ易く其の生活の家庭團樂の趣味に離るゝの致すところ、動もすれば種々な思想を失し易きによらずんばあらず、露國革命の起るや其の第一聲を「クロンスタット」軍港に掲げたり、獨逸革命の勃發するやまた其の第一聲を「キール」軍港に掲げたり、これを歴史に徴するも十八世紀の終りに起れる英國の擾亂の如

きも、一不平海軍々人「バーカー」の首唱により北は「ヤーマス」より「ノア」及「ポーツマス」を經、南に地中海及び更に絶南の艦隊所在地たる喜望峯に至るまで一齊に反亂の聲を揚げ大に時代の恐慌を來せり、幸にして我帝國海軍々人は義勇奉公の念に奮み數千年に亘り忠孝の二道を以て練成せられたるを以て危險思想に提はれて輕舉暴動するが如きことを決してこれをなきを信ずと雖も未だ兩らずして門口を網縛するの要蓋し決してこれなきにあらざるべし、これ子が自ら編らざり國體と「デモクラシー」と題する一論文を草してこれを同僚戰友に示し併せて諸先輩の叱正をまたんと欲する所以なり竊くは現下に於ける思潮の善導に資し多少の裨益あらんことを

佐藤鐵太郎識

大正八年二月

國體と「デモクラシー」

現代思潮に感ずるところあり言を戰友諸君に寄せ併せて先輩の叱正を仰ぐ

佐藤鐵太郎

一、序論

予頃日讀長江史蹟を讀み、古舟子の歌へる三峽謠に、

ねば眞實の求道心は起らないのである、我は佛子なり、然るに佛子たる我は何が故に三界の火宅に沈淪するや、我本心の狂へるに依る、覺醒せざるべからずとの考が起つた處を發心と云ふのである、佛子たる自覺を基礎として現在の生活より向上せんとする處に、向上の發達を爲すものである、前章に申上た指は佛子なりとの自覺は其本體としての自覺であり本章に申上た三界火宅の自覺は現在の實生活に就て厭ふべき怖るべきを自覺して向上の道程に上るべき第一歩である、此兩方面を適當に理解して始めて正しき發心と爲るべきである、編行に「發心佛越すれば餘行は徒らに施すならん」と言はれたが、其發達を誤るならば一步の遠は千里の相違を來す譯であるから、其發達を慎重に考慮せねばならぬ、我等は其目的の地を充分に詮議して第一歩を踏出さねばならぬ、第一歩を誤るならば其目的を達することは出来ない、發心は詳しく言へば發菩提心である、菩提は志すの心を發したのである、菩提とは無上道で、佛陀の證悟である我等は佛陀の證悟を其目的に置いて、其に向つて進んで行かねばならぬ、若し目的を故に置かないで、現在の物質的欲望の爲めに發心したり少な目的の爲めに發心したりするのは皆發心佛越すと言はるゝものであつて、こゝに發心佛越した信仰は所謂雜信と云ひ迷信と言はるゝも

(組方都合にて此の續き十五頁)

朝見黃牛 暮見黃牛
三朝三暮 黃牛如故

とあるを見て、世路の困難も亦復此の如く、社會の状態には起伏あり、波瀾あり、殆んど究る所を知らずと雖ども、畢竟黃牛如故に過ぎざるを感じ、思はずして長吁して大息せざるを得ざりき。若し夫れ案針其の法を得ず、舟首一たび轉じて、激濤の奔ぶに委せんか、突ちにして亂石嵯峨の間に陥り、挫折れ、舟覆り、行客舉て毒龍の銀口に入らん。誠に寒心すべきなり。今や世界の動亂は殆んど鎮靜し、一見將に安流に入らんとするが如きも、思潮の激流は、更に一層の急を加へ舟は新たに濤中の激濤に入れり。舟手の最も警戒すべきは實に此時にあり。

抑も思潮の變遷は、其の源を理性の向上に發すること多しと雖ども、其の一たび情熱を加ふるに至りては多く理性の判斷を逸して感情の衝突となり、澎湃洶湧殆んど底止する所なく、竟に救ひ難き大波瀾に終るは、古來史乘の明示する所なり。況んや、兇險亂を好むの術、巧に人心を撓擾し、甘言を以て衆愚を誦魅し、思慮淺くして實名の慙に渴せる、幾多の人士が、狂人として動かすの言動を以て、世人を毒害するをや。言少しく慎重を缺くの謙なきにあらざるも、假令如何なる主義主張と雖ども、理性に訴へて、冷靜に行動するときは其の毒害を貽すこと左迄に急激ならざるにもせよ。感情的判斷を以てこれに對するときは、其の結果の恐るべきこと、史上歴々明證して疑なき處なり。露國革命の起るや、現代に於ける「デモクラシー」の提唱者とも稱すべき、米國大統領「ウィルソン」氏が、特に視電を送て新政成立を願ふしたり如く、革命に關する先導者の抱負は、必ずしも一概に睡寤すべきものにはあらざりしも、理性を没却して感情の肆にするに隨ひたる露國は、今や暴民政治とも稱すべき状態に陥り、其の毒害の恐るべき史上未だ見ざる底の状態にあり。是れ等は蓋し其の由て來る處頗る遠く、決して一朝一夕

に起りたるにはあらずと雖ども、人として避くべからざる群衆心理の致すところ、自ら自衛克己の力を失ひ、終に救ふべからざるの被害を蒙りに至るに外ならず。是れ讀者の深く留意すべきところにあらずや。況して少壯血氣の人集に説くに、血沸き肉震ふ底の言論を以てし、相率ひて其所信を斷行せんが爲、故らに理性の判断を遺して感情に狂ふる言動に導かんとするが如きは、有識者の最も賤むるところにして、或は未だ率らざるの學生を率ひて、或は政治的に、或は社會的に奔走するに委するが如きは、其の心事の如何は暫く措くも、學者及先覺者の態度として最も忌むべき所なりとす。露國の醜態の如きも、蓋し此點に對する用意の周到ならざりしに由らずんばあらず。惜まざるべけんや。

世人動もすれば言をなすものあり、曰く、世界の思想は今や殆んど定まれり、この思潮に順應するものは榮へ、これに反するものは亡ぶ、而して尙これを信らざるは、愚も亦甚だしと謂ふべし、要するに、此思潮の侵襲を防がんとするは迂なり。此の如き消極的思想は、決して吾人の歡迎せざる所なり。假令如何なる思潮あり、流れて我國民の胸裏に入るも、我國民の思想にして堅實ならば、何等の懼るゝ處なきにあらずや。要は我國民に堅實なる思想を興ふるにあり。新思潮の如きは、其の來るに委せて可なりと。其の言の雄大にして俗耳に快感を興るは疑を容れずと雖ども、是れ實に其の一を知て其の二を知らざるの致す所なり。疫癘の人にせまるや、必ずしも病毒の全身を侵すを待たず唯其の心臓を突けば可なり。其の毒を阻せば足れり。もし夫れ恐るべき惡思想のごときは、其のこれを唱ふるもの、必ずしも全國に充滿するを要せず、二三或は五六の狂熱的行爲は、萬事を過古に擧り去るの力を有す。これ最も恐るべきなり。之を要するに、古今に照して變らず、中外に施して戻らざるものは、必ずしも時勢の流俗に一致するものにあらず。蕩々として世間を風靡するもの、必ずしも、眞理を傳ふるものにあらず。

ず。また必ずしも天地の公道に合するものにあらず。世間の流俗に従ふは一時の苟安に便なるのみ。これを善導せんが爲一時これに承順するが如きは最も慎重なる注意を要す。

世人また言をなすものあり、曰く、眞理研究と信仰の自由とは、人類の當然所有すべき權利なり。これを拘束するは害ありて益なし、爲政者の留意すべき所なりと。誠に一理あるの言なりと謂ふべし。然れども世間に此の說あるは、畢竟己を知つて他を知らざるの致す所なり。國法を以て個人の意思を牽束するの害は即ち害なりと雖ども、國法に背かざるが故に、何事をもなし得べしと謂ふに至つては、誤れるの甚きものなり。こゝに人あり。人跡絶へたる深山若しくは孤島にあり獨り眞理の研究に従事したりとせんか、假令如何なる言動をなすも、固より咎むべきにあらず。然れども衆人と同處し、彼此逃に交渉ある境遇に在りて、尙且、此の主張をなすが如きは、不倫の甚きものなり。必ずや、其の影響する所を積へ、害を衆人に及ぼすことなきを確むるにあらずれば、決して其の所信を公表すべきものにあらず。信仰問題に關しても、また復斯の如し。學者もし此の理を重視するの念に乏く、聞くが儘に之れを巷説し、思ふまゝに之れを公言するが如きは最も懼むべきなり。之を要するに、國民の思想に新正面を開かんとするが如き言論は、必先、これを同人間の研究に留め、各方面に及ぼすべき影響を精査すること、譬へば醫學上の發見は、先これを學理に訴へ各種の動物試験を了し、これを人體に試み、而して後初めてこれを世間に發表するがごとくなるべし。獨りに學術研究の神聖なるべきを唱へ、其の果して國民思想を善導すべきや否やを決せず、漫に學者の權利としてこれを争ふが如きは、思さざるの甚きものなり。宜く先づ熱心に學者同人間の研究を行ひ、其の彌々可なるに及んで、而して後、始めてこれを世間に發表し、依て以て國民を善導するの目的に供すべきなり。

門を認めず、自由平等の尊重を根本義として、多數國民の解放を訴ふるにあるも、社會主義は、大に之れに異り、階級戦争を以て第一義とするが故に、此間に到底同視し難き溝渠を有す。然れども詳かに之れを校究するときは、假令「デモクラシー」は必ずしも、階級打破を絶叫するものにあらずとするも、其の理論的範圍を設けて、其の實行に移るに及んば、最大多數の最大幸福を高唱し來る結果として、自ら階級打破の思想を生じ、其の究極に於て社會主義と何等の選ぶ所なきに終らん。況んや感奮的言動のこれに加はるに及びては秩序と、特權と、私を有とを現ふてこれを倒壊し去らざれば、已まざるに至らんや。

要するに國家的施設は國民全體の爲になすべきものにして、必ずしも多數無階級の爲になすべきものにあらず。必ずしも少數有階級の爲になすべきものにあらず。假へば、人の衛生は、頭首又は耳目口鼻の爲にのみいふべき者にあらず、また決して人體の生存上比較的影響少き、頭髪若しくは頭皮の爲になすべき者にあらずして、其の生存を全ふせんが爲めなり。此場合に於ては、毛髮頭皮の如きは、何等の發言權を興へずして可なり。要は、ただ國家の智識階級とも稱すべき神經系統の所示に従ひ、全體の幸福をはかるべきのみ。而して尙其の存在の意義を完ふせんが爲めには、時として全身を危険の域に投ずるも可なり。況んや一部機關を犠牲にして、假令其の所望に合せざるにせよ、全體の目的を達するをや。此點に就ては、蓋し眞率なる校察を要するものあらん。

然るに世間の學者は、民主的本能を有する「デモクラシー」なる新語を用ひ、我國民の共鳴少きを懼り、故に民本主義なる新語を用ひ、世人の感觸を柔げんと欲するものあり。而して是等の學者は「デモクラシー」の意義を闡明して、溫和なる意味よりこれを解釋し、主權者より見れば民意の尊重となり、國民より見れば、國權の運用に對し、參加權を得んとするの要求にして、

然るに退て現代に於ける我國民の思潮を考察するに所謂「デモクラシー」なるもの、其の勢力を逞ふし、學者の呼應してこれを唱ふるもの多く、或はこれを以て不可争の眞理となし、或はこれを以て、不可抗なる世界の大勢となし、或はこれを以て正義人道の表徴となし、或は世界の大平和は、この主義によらざれば、成就せざるを説くものあり。誠に盛なりと謂ふべし。然れども仔細にこれを吟味するときは、未だ必ずしも首肯すべからざるもの頗る多きを覺ゆ。

一部宗教家の説く所によれば、宗教的「デモクラシー」は、神と自己との直接交渉を旨とす。其の間に何等の教壇を要せず、また何等の教典をも要せず。況んや教壇をや、神人の交渉は解放的にして自由平等ならざるべからざるといふにあり。又一部政治家の説くところによれば、政治的「デモクラシー」は、産業に對する相互共同の精神に基き各人に與ふるに、公平なる利益を以てすべく、決して其の間に種別的等差を設くるを容るざらずといふにあり。而して又社會的「デモクラシー」と唱ふる處によれば「デモクラシー」は社會平等の精神に基き、凡ての階級的階級を脱し、完全に解放せられたる吾人を見んとするにあり。教育的「デモクラシー」も亦、其の根本に於て全く之れに一致し、貴賤貧富の別なく、悉く平等の教育を受けしむべく、特權階級に對する特權教育の如きは、全然これを否認し、併せて各人が其の兒孫の爲に、特權の教育を受けしめんとするに反對するものに似たり。假りに善意に之れを解釋し、「デモクラシー」的教育は、其の内容に於て、被教育者の解放を意味するものせば、之れにより修業者の活動性を増進すべく、其の結果は教育上に偉大の効果を顯はし、或は發明的思想を刺撃し、創始的才能の發達を促し、或は自覺自尊の精神を振作して、國運の隆盛に資するこ

其の間に何等危険の相なく、新思潮は既に此の點に向つて進みつゝあり。我國民のこれに順應すべきは固より當に然るべきところにして、是れ實に國運の隆盛を期する所以なりと説くものあり。果して然らば「デモクラシー」は外國語を用ふる我國體の説明とも稱すべし。祖宗と先帝恢弘の聖蹟に合し、何等の桎梏なきを信ずべきに似たり。世の學者たるもの何の必要ありて誤謬に陥り易き外語を高唱して、我國固有の思想を眞視せんとするや。而してまた、何故に我國體の本義を查察し、堂々たる態度をとり、國民全體を以て、國權の運用に參加せしむるの冀望を貫徹するに努めざるや。而してまた、何等の根據ありて、故らに他の不穩健なる意義を抱含し易く、而かも歴史上實際上恐むべく恐るべきの結果を生じ、或は生じつゝある事實を眞視して、民主或は民本主義を未だ學ばざるの國民に鼓吹せんとするや。凡そ思想に關する問題は、其の果して正當なるや否やを論結する場合に於ても、或は徒らに理論に走り、或は其の視界を、學者間の批判と影響とに止むるが如き見地を捨て、其の果して多數國民に如何なる影響を興ふべきやを問はざるべからず。

以上述ぶが如く、近來に於ける「デモクラシー」主張者の論ずる處は、殆んど堂々一貫したる所なく、或は我等の論ずる新「デモクラシー」は歴史的精神を受けて向上平和し、何等の厭惡すべき處なきに至れるものにして、舊「デモクラシー」にあらずと稱し、或は我等の「デモクラシー」は單に、政體にあらず、また國民的態度にあらずして信仰なり。即ち吾人の生活の精神にして主義理想なり。從て歴史的精神を受くるものにあらず、政治、宗教、産業、教育を一貫し、相互間に於ける、尊重、扶助、親善の精神を發揮するものにして、少くとも政體以上のものなり。從て眞の「デモクラシー」は、必ずしも民主政體なるを要せず。寡人政治といふも、君主政治といふも、皆この主義を以て一貫し得べしと。凡そ是等論者の論ずる處、殆んど數ふるに

暇あらずと雖も、要するに自己の理想を高唱せんが爲め「デモクラシー」の流行語を借用し來れるに過ぎざるの感あり。是れ大に注意すべき處にあらずや。試問は、國民間に於ける相互の關係を道徳的ならしめんとするは、何の必要ありて「デモクラシー」の如き、誤解し易く、今や殆んど換骨脱胎して殆んど舊義を存せざるの蓋語を用ふる要ありや。國權の運用上各人に同等の權利を興へんとするには、何の必要ありて「デモクラシー」を高唱するや。もし「デモクラシー」論者の言の如く、我國風の醇なるものを取て、これを善導せんとするに外ならずとせば、果して何の必要ありて國風復興の大號を捨て「デモクラシー」を高唱するの要ありや。是れ予の解する能はざる處なり。更に試に兄弟等間に問はん、兄弟等は何故に國家を焼くの勞香に垂注して、自家膳上に備ふべき、更に美味なる佳肴の我が腹厨にあるを忘れたるや。今現に食膳に上れる酒肴の、不味なるを熱罵し、國家膳上の嘆息に佳にして、其の品種の反て劣等なるを惜らざるや。

之を要するに、世間の「デモクラシー」論者は、假令自己の名利の爲にするものにはあらざるも、「デモクラシー」の爲に「デモクラシー」を唱ふるものにはあらざるか。もしそれ然らずとせば、兄弟等は自ら其の心理状態を内省せざるべからず。而してこれと同時に、世の「デモクラシー」の眞意義を知らざるものに對しては、密かに歴史的長所と短處とを分別し、其の善良なる意義を發揮せんが爲には、我古來の國風を醇化し、自ら「デモクラシー」に合する如く、これを善導するの方針によらざるべからず。所謂智識を世界に求むる所以のものは、決して我長を捨て、彼の長を取むるべしといふにあらず、我の長する處は、眞面目にこれを尊重し我の長せる處に向て彼の長を探り、以て我短を補ふべきなり。吾人の見る處によれば、所謂新「デモクラシー」なるもの、美點は、一として、我が國風に備はらざるなく、反て更に善美なるものを發見するに難からざる

が如し。而かも世人の「デモクラシー」を高唱する所以の者は、職として我國風を内省して、之を尊重するの余少きあり。而して我青年のこれに共鳴する所以のものは、勝上佳者なきに平ならざると同時に、所謂「デモクラシー」なるもの、嘆息に美なるも、其の本體が果して如何なるものなるやを知らざるに由る。是れ予が所見を述べて、讀者とともに「デモクラシー」の研究に従事し、且予の所信を頌して、之を讀者に呈せんとする所以なり。予は右の見地に基き、先第一に、國家と國民性との關係を研究し、而して後所謂「デモクラシー」なるもの、果して如何なるものなるやを論究せんとす。



詩

在大阪 山田秀太郎

此余有感而特賦之欲贈于床次大臣仍以之似於鼓城松尾研兄併乞政

往年吾在關稅局時仰君
君固學士而居謙
不恥下問衆以君爲拔群
今也君爲宰相喧
飽奉憲法對衆民
大雅量以使成人
嚴父精正稱畫伯

寫憲法發布式振
德不孤有鄰何疑
身爲顯官節堅持
賢宰之名傳世上
吾懷舊情賦此思
神州由來冠絕萬國
地靈之處人靈奇

此曩所贈幽棲士兒島三樹君今以之似于鼓城松尾研兄併乞正
大正崎人名曰兒島三攝
剛毅寡慾寄心仁
聞說如修驗者能爲鑒識
又克治人之病真
架崖設樓夜凄其
不關世評爲世悲
視人非難淡如水
立塵表而行所思
秀吾奇骨雖自許
生平豈及君操舉
不挽不屈嘗艱苦
猶立此間爲笑語
堪感固以執法華經
不動此心歷年所

機微譚語

山根青村

八二、鬚髯之美談

連歌師飯尾宗祇は紀伊の人、性鬚を愛し而して其理由の一は香の薫り鬚に止りて絶えずと云ふにあり、一生之を剃らざりしとかや。宗祇亦旅行を好み旅から旅へと渡り歩きけるが、或時上總の濱邊の黄昏時に、抜刀を振りかざせし追剗に遭遇せり、脅やかさるゝ迄もなく衣服調度言がまゝに手渡しける、さては流石の歌人も禪一貫の素裸に、すごとくと美髯を垂れて行き過んとせしに、コラ待て其髯も帯にするに好さそうなり、早く抜いて渡せと追剗の強請、これには宗祇も始めて胸をつぶし、
我が爲に簪ばかりは許せかし
ちりの浮世を捨ておはるまでと咏みけるに、賊何と感じたりけん「うい事申されたりこれ體のやさ法師」と云

ひつゝ、衣服を返し四五里がほど先に立ちて道案内をしたりとぞ。(宗祇傳國物語)
歌の徳髯の美談とや云はまし。鬚に就ては二葉亭四迷の「浮雲」の劈頭に腰辨連の棚あるしあり、類鬚、鬚鬚、やけに興起したナポレオン鬚、獅の口めけるビスマーク鬚、さては矮鶏鬚、絡鬚、有りや無しやの幻し鬚など鬚は時代によつて其形に變遷あり、從て鬚に對する觀念も亦時代によつて違ひあり。天正の頃には「この鬚なし」と嘲けられて刺し違へて果てた岩崎嘉右衛門あり、三代將軍の傳相の身にて親ら鬚を剃りて登城し、爾後諸侯一般に鬚を剃る風習を馴致せしめた土井大炊頭あり。西洋でも畜鬚を貴人にのみ許した時代、兵士に鬚の刮方を一定させた時代などありとかや。煙草盆に毛抜を添へて客間に出し、お客の主人待つ隙を鬚抜に費した、足利時代の風習杯も可な

り奇抜なり。文化十年の五月に芝の愛宕山上に長髯會を催した會主は、有名な大關大中年りしも、定めしちむさからんと殆んど誰も來ずし失敗にたり。天明年中江戸青山に鬚の亦四郎なる老人あり、ある侍の請はるゝまゝ、一尺二寸の長き鬚を三十兩で賣りし所、その侍翁の面を持出して、老人の活鬚を一本づゝ抜いて面へ植え、三日かゝつて漸く植え了つたと百家奇行傳にて見たことあり。
鬚の過去帖は大略右の如く、而も維新後明治の中葉までは、鬚は官吏階級軍人社會のシンボルなりしが、今は吳服屋の番頭銀行の手代まで、猫も杓子も大鯨小鯨鬚は鬚の眞似をして、觸向對面殆んど鬚で鼻を衝く爲體。前髪で通つた鬚を「鬚時代」と云ふ川柳は昔の事、今は前髪時代の前人の學生までが鬚に浮世を茶化す世の中、價値も威嚴も有つたものは、寧ろ鬚なく一文字に結んだ口元が却て人品骨柄の上に威嚴と價値を認むることゝはなれり。
思ひ起す聖祖當年の教界戒行本位の律宗なるもの、如上鬚で誤魔化す今の世態

と似たらずや、烟眼達識の聖日蓮、律國賊の鐵錘を彼等が頭上に落下せしもの、快言ふべからず、今も猶ほ或一門の如きは、肉食妻帯嚴禁を唯一の誇りとして漸く教界の一隅に氣息を保護せるものあり、若しそれ裏門より其醜態を瞥見せんか、鼻を掴まざるもの能く幾人ぞ。地體今の世の持戒沙汰、てんで受取り難き所、さてこそ如來は末法の我等に對して、戒緩乘急を遺誡し給へり。兎もあれ第一義をぬきにして人氣取の誤魔化し策、至竟幾何の價値かあらん癡呆感しの是と同一徹のみ。

聖語、今の律宗の法師原は、世間の人には持戒實語の者の様に見ゆれども、其實を論ぜば天下第一の大不實者なり。(下山御消息)

八三、本尊の選擇

菅野藤四郎と云へる人、料理の道にも委しく、もと淡路の産なり、ある國司に仕へて後流浪せし頃、予が許に來りて二歳ばかりを送るに、ある町家に住居するとして種々の物求めける折から、先づ持

佛を得んとて、日蓮の木像ありけるを見て價を聞き、又法然の畫像のあるを見て價を聞きける、伴ひたる人不審りて、其許は何宗にておはすと問へば、菅野笑つて我等何宗と定まりたることなし、依て二祖の中に價の下値なるを買ひて、その方の宗旨とならんと思へりと云へり物にかゝはらざる面白き志なり。

(柳里著雲津雜誌)

世には本尊の奉安を世帯道具の買入れと同一視して、兎角お手輕にと我流を主張し、念佛でも題目でも構はんぢやないかと勝手な熱を吹く者あり、それを又物に拘泥せぬ酒脱のやり方よと讃めちぎる者輩あり、以ての外の奇怪事なり。一代の美術家柳洪國の如き斯道に堪能の偉人にして、猶ほ且つ時流に従ふて菅野藤四郎の輕舉妄動を稱揚せり、況んや無思慮の凡俗をや、由々敷問題なり。等閑の思ひをなすべからず。由來信仰とは全我を對境即ち本尊は唯一ならざるべからず、絶待完全境界ならざるべからず、よい加減の間に合せ物てよいではないかと速断

デモクラシーと佛教と國體

松尾 鼓城

(一) デモクラシーの素性

昨年(一九〇九年)から本年にかけてデモクラシーの傳播の勢ひは恰ど秋の曠野を燒くの有様であつた。我等は學者といふ學者から筆に口に之を新聞、雜誌、著書、講演の上に於て、政治に、勞働に、食糧に、教育に、諸有る方より問題として見聞させられたのであつた。しかし其議論は一様でなかつた。其起原發達の徑路に於ては「希臘のデモスとクラテインの結合語で、アリストとクラテインに反對して大騒ぎをした、アリストクラシーから見ればデモクラシーはモツブである」と謂はれた時から起り、爾來デモクラシーは種々なる場合に用ゐられ、又有ゆる時代的活動して容易ならぬ辛苦を嘗め、漸く其思想的洗練を経て、圓熟の域に入り、今日にては能く開展進歩し來りて完全なるものとなつたのだ」といふに略一定して居る。しかし其學者の所謂場合、即ち對する場合の立場に於てデモクラシーの所論は一定せず、デモクラシーとは斯だ、イヤスだ、イヤそれは古いデモクラシーだ、ナニ其の方が陳腐だ、イヤ實は斯う云はねば否な

デモクラシーと佛教と國體

い、イヤスう云ふあゝ云ふと云つて居るかと思ふと、博士學者の議論が一二月の間に動搖して初めに云つたことは棚に上げて又何とか彼とか云ふ、一寸デモクラシーの目安さへ付け難い位のものであるが、結局のところ、其の純理論として見るべきものは自由、平等、及び解放といふやうなところに歸着するのである。壓迫、專制を呪ひ之より免れんとしたるより起つた歴史附のデモクラシーは漸次理想の高處に向つて進み、人類の總ての痛苦を解き幸福を享んとするの權利を主張するに至つたのである。之は秀吉が下郎から侍になり、一城の主になり、一國の主となり、遂に天下にまで經上つたと同じ意味である。男と云ふことが單に男子といふことであつたのが、天川屋儀兵衛は男で云ふと云へば勇快に聞かれ、遂には道徳をも意味するまでに至つたやうなものである。つまり元の起りは下郎から成り上つたのであるから、學者の見眼では、侍時代を捉へ、又は一城の主を捉へて議論をするものもあつて、其處で様々に説が

あるやうに見えて、目安も立たぬまでに議論もされたが、先づ善意に解釋して、自由平等解放

するは、總て自己を侮蔑せるなり。娘の嫁にすら先方の血統、家柄、財産、教育、信望、人格など最も入念に取調ぶるにあらざるや、況んや信仰に志すもの教義の取捨は勿論の事、本尊の選擇には極めて嚴密の用意を要す、命懸けにて簡別すべし、ゆめ輕視して千歳の悔をのこすべからず。

聖語、汝早く信仰の寸心を改めて、速かに實乘の一善に歸せよ。(立正安國論)

○うた(小女の)

春雨のさびしき路のかなたには
電燈のあはく見ゆるなりけり
友どちのおどせし事を思ひ出し
我はひたすら走りかへれり
○同 (小童の)
おとなりのかあいゝ犬を呼び出して
あまりあそんでくたびれにけり

等が其精神であるとしたら宜いのである。斯う見たならばデモクラシーも元の起りは草履糞みでも太閤と云へば天下様だ。彼の所謂自由平等解放が、放縱な自由、悪平等、我儘等の意味のものでなかつたなら何もデモクラシーを毛虫の如く嫌ふにも及ばぬ、爆裂弾でもあるかのやう恐れることもない、靜に掌に載せ懐に抱いて其素性も見極め、自分の方をも顧みて、之と兄弟であるか。夫婦になれるかを考へるのに差支へはない筈である。

(二) 我國固有思想穿鑿の必要

群羊の中に狼が飛び込み、女ばかりの眼達みに強盜が這入つたやうにも考へた人もあつたデモクラシーを、捕へて見れば案外にも自由平等解放だけの正體であつては、ナンの事ぢや、機曾均等も門戶開放も職工組合も民本主義といふやうな事も皆之が泉であつて無理もないと同情も起るが、さて夫婦になるとして見ると、少しく、實の所は此方にはチャンとモ少し上等の良妻が既に業に定まつて居るので、デモ嬢には氣の毒だが我日本には必要がない、それは英米あたりで上々の氣受けて買ひ込んで貰ふべき品もの、若し露西亞や支那あたりには夢中になつて屋敷をもたゝき賣るまで蒸氣する品物であるに過

ぎぬと御世辭まじりにマツを申し上るまでである。然らば既に良妻として鎮座します其の襟の容姿如何と尋ねられるであらうから、御披露に及びませしやう。

(三) 我邦固有の道とは何か

我邦固有の思想と云へば神佛の二道である。又古いと云はれるか知らぬが、幾ら美人の化粧者でも幾千年連れ添ふた古い妻君であつて見ればオイソレと離縁は出来ぬ、彌々不都合ありと認め、又一際立勝つて居る事を見極めて、なべては其んな非道なことは出来ぬではないか。一寸云つて置きたいのは固有と云へば神佛の道とのみ思ふ人があつたが、勿論神佛は我邦の道で大きな意義を含んだ美しいものを有て居るが、佛の二道も其特有の善質を捧げて我邦の國民思想を涵養し善導し來りたるに於ては既に固有の道として認められるのである。此三道の融通し調和して新に日本の特有性をも作つて見れば之は三つながら固有の道である。デモクラシーに申しあけるが、御心配御無用、今のデモクラシーも若し我邦の爲に害なくして良く資する所があつたならば亦十年の後に百年の後に固有の道と云はれる事に(いやでも)なるであらう。

由平等解放である。吾人の實生活は此半面である。此の半面とは何か煩惱である、業である、苦である。而して煩惱は我(小我)といふ差別的心、その根本は無明の暗迷であるから業となり苦となつて自ら縛り自ら苦しんで居るのである、之を發心して自由平等解放の境地に入るのである。

たゞ注意すべきは佛教の方では其の束縛(假りに)は自己の罪と見るのだから先づ責任を自覺して自己自分の努力(發心)を用ひて自由平等解放に到らねばならぬが、デモクラシーの方では其の束縛(壓迫等)を社會の罪に歸して他に責任あるもの、如く世を呪ひ他を惡むのである。之が佛教とデモクラシーとは似て居るやうで大違ひである。而して全人類が自己に内省し覺醒して己れの束縛を解く努力は總て全人類の自由平等解放であつて、之は自然であり無理がなく所謂デモクラシーの心に契つて居るに反し、他に責任を嫁し之を罵り惡みて改革せんとするのには此に無理があり不自然である。尤も彼は佛敎で云へば其思想の立脚地が無明緣起式であり之は佛界緣起式であるから其企て及ばざるは如何とも致し方がない。

(六) 彼我思想の勝劣

然らば我佛敎の自由平等解放は遠くより有るのみならず健實である、何を苦んで危險性を帯び、面白からぬ歴史を有し、種の不良品を用ひ

といふこと、古いといふ事は別問題である。又多くは古いもので遣つたものは變らない健康體のものである。つまらないものはスグ消えて行く又古い體より生れぬ新しい者は一つもない、又改造と云ふに就ても、古い文明を基礎としての改造は健全でも、全くの新しい改造を夢見た試みは野蠻状態原始状態を再遺するに過ぎぬ(臺灣の生活を理想生活と思ふ人は止むを得ぬが)

(四) 佛教とデモクラシー

(備註)デモクラシーに就ては専門の服部卯之吉博士が思想講演會に二回まで演説され其の講演筆記は出版されることになつて居るから就て見給へ) 佛教の思想は自由平等である。少し型は違ふが解放である。之はデモクラシーの如く苦辛を嘗め永い時間に散々頭をたゝかれて發達した思想ではない、釋尊が救済主として立ち給ふた最初からの思想である。最大覺者(佛)は自由の境界である、イヤ自由といふより少し大きいのが先づ自由として置く、淨我常樂は即ち佛の境地得給へる自由身金剛身であつて、此の總ての半面の不自由は無常なるものとして吾人の束縛である。此の無常の境を脱して常住地の即ち自由界に入るのが目的であつて、其れを獲得すべく獎勵されたものが佛の教である。離苦得樂(離苦得樂)は覺悟(覺悟)が最後の理想であつたならば苦迷(不幸不自由)を離れて樂悟(幸福自由)に入ることに於てデモクラシーの純理論か

る必要があらうか、我佛敎の有せるデモクラシー(試みに有すると云ふ)は最も古く又最も新らしき、且つ良(優良)性である健全性である。彼の自由平等解放は種が不良いから、時に自由を主張するに「我が」とやる。個人本位に立つて、過激なる社會主義の共産をも主張し却つて其れが不平等(之を平等といふ)であり自分が縛ることに氣が附かぬのである。勞働者が自由を主張し、工場滅亡の因をなし遂に餓ゆることに於ても自由ならずやと酬言せられた例も思はれて氣の毒に堪へぬ。

要するに佛敎の教は人の心を一乘に導くのである。佛陀が立てる樂園の自由平等の境地に抱容さるべく我々は其の思想の醇化に依りて苦痛なく之を達するのである。デモクラシーの方では個々の分散な我(個人本位)であつて多數意志(無明緣起)の集合勢力を主張するのであるから露國の現状のやうな事も湧て來る。佛敎徒もデモクラシーの人も要求は同じであるが、實現の方法及び結果は大に違ふて來るのである。

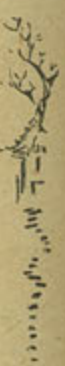
(次號に我國固有の自由平等解放を述べて新入のデモクラシーに御無用を云ひ渡すことにする)

- 一金參圓也 大阪長尾猶之助殿
- 一金五圓也 東京西山吉五郎殿
- 右統一雜誌部へ御寄附領收候也
- 統一編輯部

ら見て苦情はあるまい。又總ての人類を平等に取扱ひ、慈悲の愛撫の中に救済の手を下すのが佛陀である。其當時の階級を打破し、各人存在の佛性を尊重して一様に蓮華臺上の人たらしめんとことを最終の仕事とせられたのは佛陀の公平なる心海から起つて居る事である。如何なる種類の人も平等に敬禮した常不輕菩薩の記されたる法華經のその品を讀んでもスグ解る筈である。デモクラシーの平等どころか佛敎では十界(五具論に立脚して)を平等に取扱つて居る、依(非情物)も正(生物)と同様(不二論に立脚して)に取扱つて居る位である。それから解放の一例として法華經の提婆達多品は最も良く現れて居る、成佛を解放として云つては聊か合はぬが、彼の方から云へば解放の言葉に執着があらうからマア解放として置くが、提婆達多品は實に女子解放の最大なる例證である、女で畜生で八歳の小供を佛陀の境地に解放したのだから此上はあるまい、女子選舉權も被選舉權も此前には顔色は無い筈である。(舉一例諸である一葉落ちて天下の秋を知り給へ)

(五) 其二

(此三徳の説は我井村法兄の説を參考す) 佛陀は三徳を現はしたに於て其境界を得給へるのである、三徳とは法身である。般若である。解脫である。而して法身は自由である、般若は平等である、解脫は解放である。之が佛敎の自



井村日威師述

日蓮聖人教義綱要

第二十回つゞき

(六頁よりつゞく)

のである、三界の火宅に囚はるゝ考のある中は眞實の菩提心は起らない、重ねて經文を引いて眠ふべきもの、求むべきものを示す、先づ眠ふべきものは我等の世界である。三界は安きこと無し猶火宅の如し、衆苦充滿して其だ怖畏すべし、常に生老病死の憂患有り、此の如き等の火熾然として息まず。

求むべきものは如來の境界である、如來は已に三界の火宅を離れて、寂然として閑居し、林野に安處せり、今此三界は皆是我有なり、其中の衆生は悉は吾子なり而も今此處は諸の患難多し、唯我一人のみ能く救護を爲す

眠ふべきを眠ひ、求むべきを求め、唯我一人の世尊の御慈愛の下に我等の全精神を籠めて突進するを我日蓮主義者の發菩提心と言ふのである。本節引用の經文は専ら譬喩品に依る、壽量品の譬喩を參照研鑽せらるべし更に意義判明すべし

統一團報

清明會主催國民思想涵養講習會

歐洲の大戦は漸く終熄せしが、其影響は其大にして殊に國民思想の上に著しき變調を呈し來れり。西歐の物質文明に心酔して建國の大木を顧みざるものあり、狹隘固陋にして世界の趨勢を慮らざるものあり、妄動輕率奢侈淫逸にして健實なる自覺を失き國民思想の適路すべし所を知らざる状態にして眞に憂國の士が憂座すべからざる秋、清明會並に主催となりて同志相計り、天下の名士を屈請して中正の一大指南を仰ぎ、以て國民思想を涵養せんとして、三月廿五日より一週間毎夜統一團に於て大講演會を開催せり。左に其大略を抽出せん。

三月廿五日 午後六時半開會
開會の辭 宮原六郎君
儒教と現代思想 文學博士 服部宇之吉君
西洋文明の概要と儒教の綱要とを解説して現代思想を批判せらるゝこと鮮明なり。
三月廿六日
思想問題に就て 海軍中將 佐藤鐵太郎君
始終一貫して慈悲報恩の大精神を鼓吹し、デモクラシーの長短を論明して、當に國民が遠從すべき所を示教せられしは切切。
二十七日
國防の本義 海軍中佐 瀧部洋六君
親しく觀察せられたる世界各國の現状を説明し、國防の本義と其必要とを論じ、忠君愛國の精神を力説せられたり。
二十八日
世界の大勢 文學博士 箕作元八君
世界の思想の大勢を辨じ、思想と國運との消長を明かにして、國民の自覺運籌を勸奨せらる。

二十九日
亞細亞主義 文學博士 澤柳政太郎君
民族の歴史差別を説き、民族團結の必要を論じ、世界の平和及び國運發展の基礎として、先づ亞細亞民族の團結を力説せらる。
三十日
救護事業に就て 救護課長 丸山勉吉君
最近觀察せられたる歐米諸國の社會狀態諸種の救護事業を仔細に説明せられ、更に我國の現状に及ぼし、斯業の國家的重大なることを力説し、具體的説明を加へられ四時間熱辨よく憂國の仁士をして啓發奮起せしめしは多謝。
三十一日 六時半より服部博士の續講一時八時より
佛教と理想的文明 大僧正 本多日生師
公平なる批判を以て東西文明の優劣を痛論し、理想的文明の歸着たる佛教の眞價を力説し、萎靡せる國民思想に一大光明と刺戟とを與へられたり。
かくして七日の大講演は終了し、矢野閣下の閉會の辭に次いで、天皇陛下の萬歳を三唱し、日出度く散會せり。聽講生は三百の定員を越ゆること百數十、講堂立錫の餘地なかしは如何に當會が時局に適切なる要求なりしかを知らるべし、終始講聴せしは其感化の甚大なりしを察するに足る。

統一團春季法要大講演會

三月二十三日午後一時より統一團内殿の御寶前に於て春季大法會を行ふ。春風習々として渡れば人心自ら和らぎ深信隨喜の美男善女早くも堂に滿つ。法鼓心々として鳴り渡れば定期式始まる。本多日生現下大導師として衆僧と俱に法座に現はれ給ひ一會同心にして讀經唱題すれば梵音滿々として法味自ら堂に漂ひ靈山の虚空會もかくやと疑はる。二時半式了りて直ちに大講演に移る。講師諸題は如左

顯本法華宗々學講習會

三月廿五日より一週間統一團に於て宗學講習會を開催す。當宗有爲の選士廿一名、隨喜參學者等相集りて本門の重要教義を研誦し、現代思想問題に對して日蓮主義者の執るべき大道を講究し、其所信を明し、氣脈を通じ舊交を温めて、不惜身命の法戰を佛前に誓約して其教區に歸歸せられたるは、邦家の爲め慶賀すべき、近來の快心事なりき。講師及講題、研究教義並に參學講習者の諸師は如左
△先づ開催の法會を營みて講習に入る
二十五日 能仁一導師
二十六日 野口日主師

吉美大法會と建碑式

濱名湖上波靜かに湖畔風暖かく、雙蓮山頭花笑ふの際、吉美妙立精會に於ては無敵大法會を奉修しけるが現童阿本權僧正は熱心權僧徒を勸誘し開基日什大聖師の御高德を無窮に傳ふると共に、其の當年に於ける御像業を偲ばしめ、旁以て御高恩に奉答すべく、今御草庵の聖跡地たる小丘を、石材以て數段高く築造工事を施し、一碑を建設して井村僧正を招聘し、去月十六七八の三日間大法會を最修し、其の建碑式を執行せられたるが、近年稀に見る人出にして、十六日は午前午後二回法要、午後一時松本布教師説教四時御草庵碑前に於て一同碑前攝影を爲す、此の法席一列せし重なる參拜者は、吉津村長、鷲津課長、妙立寺檀家總代人、大連佐原、豊田等の數氏あり、午後八時講演、増田智靜師「開會の辭を松本布教師「寺院と修養」を、山本布教師「父母に奉養せよ」を、井村僧正「信仰の必要其二」を力説す、十七日法要は前日に同じ、午後一時説教、講師山本布教師、同四時日清日露兩戰役死病没者追悼法要を處修し、夜に入りて開演、増田師「開會の辭」を、井村僧正「信仰の必要其二」を、大津布教師「善根を種よ」を、井村僧正「信仰の必要其二」を獅子吼す、十八日御開山忌を奉修す法要前日に同じ、午後「萬善」の題下に高橋常事廣長舌を振はれたり。

統一閣日曜講演

三月二日 晴
本尊の本體と其の形式 高木本順
聖德太子と日蓮上人との融合點 松尾鼓城
日蓮上人の聖訓要義 本多日生
三月九日 晴
傍聽者七百五十名餘
德本主義 高木本順
今生の思出 山根日東
日蓮上人聖訓要義 本多日生
三月十六日 晴
傍聽者八百名餘
法華經純界の理想 小西日喜
日蓮主義と思想 關田日城
日蓮上人聖訓要義 本多日生
傍聽者八百名餘
三月二十三日 晴(春季大會別項記事參照)
釋尊に歸れ 佐藤重賢
日蓮主義の本領 原田日勇
日蓮上人聖訓要義 本多日生

統一閣釋尊降誕會

四月六日午後一時より花祭釋尊降誕會を當閣に於て修行す當會は閣所屬各會と顯本法華宗東京寺院との主催に係り一段の盛況を極む閣前廣庭には萬國旗を蜘蛛手に張り紫幕を張り閣内御寶前には裝飾御供物等莊嚴

- 曼陀羅本尊と其事現 野口日主師
日蓮主義と敬神思想 能仁一導師
本門戒壇の精要 關田日城師
新思想と日蓮主義 井村日成師
本尊の要義と歸結 本多日生現下
信仰の要義と其歸結 同
得益の要義と其歸結 同
三十一日 三時間
佛敎倫理觀の概要 同
思想問題に對する態度及其解決方針 同
講習終つて管長親下より講習了證書を授與せられ一道の訓話ありたり。
(講習選士)
△千葉縣 (印のあるは振致生なり)
○秋葉日慶 廣部永真 ○武田顯龍 飛山日甫
○山田誠心 古口靜叔 ○野老乾一 宮川光熙
○柳生正生 米倉義明 ○池澤快整 高貫慎一
○初芝智泉 五十嵐吉正 ○佐藤重賢 ○土屋實生
○堂亮雄 ○成島日衛 ○栗原顯有 鈴木正二
○小竹俊雄 ○土屋眞容 松永會淳 野口海印
○大橋日鏡 横山會章 竹内無着 黒須無外
○山岡日福 ○齋藤日章 富田良達 水野乾心
○中島元道 前田日應 吉塚敬太
△茨城縣 ○蓮田純榮 ○神奈川縣 ○三上義敬
○野川縣 森川秀光 ○大津日文 ○山本堅晴
○岡本圓正 木下圓通 ○愛知縣 ○松本堅晴
○有田安道 ○京都 萩原啓門 清水一乘
○金光孝碩 ○大阪 ○上田智量 ○京藤義照
△兵庫 ○熊井木光 ○高田日暢 ○川崎英照

傍聴者八百五十名餘

山武統一團教報

○二月二十五日、山武郡丘山村小野小學校に講演を開く、同日午後一時より「開會」高見龍、(修養に就て)「原原風有」イブセンと日蓮上人、成島日衛、「日蓮主義人生觀」中村日錦三師の講演あり、當日の出席者の重なるものは布留川校外教職員、學務員栗原嘉助、軍人分會長齋藤修一郎等の諸氏にして五時半開會せり。

○三月十日、同郡大和村軍人分會に於て記念日講演を開き、午後一時より高等小學校に於て「開會」分會長石田義之「法華主義と軍人」成島支部長、「歐洲戰亂に就て」砲兵大尉戸田透二氏の講演あり、午後四時半開會聴衆百五十名。

○三月十五日、同村小學校に於て、青年團春季總會を開き午後一時より「開會」青年團長細谷要之助、「日蓮主義と修養」布教師土屋賢生、「日蓮上人の忠孝觀」成島日衛兩氏の講演あり、聴衆二百五十餘名盛會なりき。

○三月十八日、東金町片岡氏宅に支部例會講演を午後七時より開く、會するもの山岡日衛、竹内無着、成島日衛等の諸氏、而して「彼岸に就て」竹内、「信仰要義」山岡兩師の講話あり次に、同夜は清君の統一節、勝田君の「薩摩琵琶」の餘興あり却々の盛會にて十二時閉會

○三月十五日、長生郡豊田村長尾小林大榮寺に顯本教會並に春季布教會を午後一時より開く、開會、宮川光三氏、「信仰に就て」山岡誠心、「日蓮上人人生觀」小川玉秀三氏の講話ありたり、當日は雨天にも拘らず、聴衆百二十餘名盛況のよし。

○三月十四日、東金町妙福寺内妙法會に於て講演並に茶話會を開き、會員三十餘名相會し、金坂乾愛、高貴見龍、成島日衛三氏の講話あり毎回来道の士、金坂氏の熱心により増加しつゝあり誠に慶賀すべし猶此會日には門前町内各戸に題目の提灯を掛くるは美風といふべし。

萩の日蓮主義發展と 細野旅團長の獅々吼

萩日蓮主義研究會は陸海軍之將校及刀圭界の多數の志士實業家等相集り細野旅團長を中心として近來長足の發展を爲し細野師は去月二十日二十一日兩日兵庫縣師磨本妙法寺講堂講堂眞實自坊の日朗上人六百遠忌紀念傳道に臨み。

「徹底せる同情」の題下に長時間の講演を爲し姫路廣島の教説を視察し三月二日には山口縣美祿郡青年團總會に臨み。

「大正國民の自覺」の下に三百名の青年の爲講話し同地に於ける日蓮主義運動の第一鐘を打ち引續き十四日には細野旅團長の管内巡視を兼ねて思想上の大講演あり盛に日蓮主義の宣傳あり彼此相俟て近き將來に大なる開拓を見るべく同十六日午後七時よりは研究會主催の下に萩最大の劇場講堂に主義發揚大講演會を開き。

▲開會の宣言と所感
野 北 中 佐

▲建國の理想と日蓮主義
紀野俊耀師

▲國民道徳と日蓮主義
細野旅團長閣下

▲閉會の辭と研究會趣旨
二階 大 尉

聴衆二千八人として大梵音に自覺を喚起せり其れより高大学に講師懇勞會を開き紀念撮影の後宴に移り談論風發歡興盡き細野將軍の發聲にて兩陛下と日蓮主義の萬歳を三唱し散會せるは實に午前二時也。

同日二十一日には研究會例會を開き

▲勇猛精進
村田一等軍醫

▲日蓮主義女性觀
紀野俊耀師

北川大佐同夫人以下多數の新研讀者を出したるは實に快心の事なり。

同日二十二日妙蓮寺に彼岸法要後

▲日蓮門家檀信徒の自覺を望む
紀 野 師

終りて昨二十一遷化せられし先住朝倉俊達師の追悼法會を營み會衆皆追慕の涙にむせびたり嗚呼國家多事の日に此有爲の宣教者を失へるゝや痛歎何ぞ堪へん。

四月六日研會左の講演にて盛會なりき

▲日蓮主義實感
二階 大 尉

▲封建政治と日蓮主義の消長
北川 大 佐

▲大藏經の分列と統一列
紀野俊耀師

日朗上人六百年祭

日朗上人は日蓮聖人の高足にて師承第一の稱あり、日蓮聖人悲風雨の一代を通じて影の形に隨ふが如く常侍奉公せられ德行百世を照す、元應二年正月二十一日東京池上本門寺内前谷(今の照慶院)にて七十八歳を以て示寂、滅後三十八年にして後光嚴帝より菩薩號を賜ふ、本年は正に六百遠忌に相當す。

本門寺は日蓮聖人の開創せられたる靈刹、聖人入滅の靈蹟たり、日朗上人は師承を以て第二世に居り、山を築かる、山門今日ある實に日朗上人の力なり、今茲六百年に當り、本門寺に於ては四月二十日より三日間盛んなる。

報恩大法要を遂修することとなり、既に記念事業として諸堂の修營成り、山内諸員晝夜準備に忙殺さる、二十日二十一日は正午より十種供養の前後會を修し、二十二日正午には放生慈濟會を營み、三日間を通じて末寺總登山法座に列り毎日五十名の稚兒を出し、音楽大法要の盛儀を設くる由、殊に

村雲門跡日榮大法尼公の御親教連日午後三時よりあり、村雲法嗣日淨新尼公も臨席あるべく、全國各地方より團體參拜の申込み數百組に及び稀有の盛儀を見るべし、二十日には村雲法會第十回の總會本門寺に開かれ、二十三日には大新講會並に施餼鬼會午前午後に亘りて修せらるべく、例年の

千部會は二十四日より二十八日まで引續き執行、満山櫻の花開ける間に雲の如き群衆、蓋し例年の御會式にも比すべき賑ひならんといふ。

朝倉俊達師遷化

本年一月以來病床にありし故法樹院日弘上人は遂に

三月二十日午後十一時遷化せられ同日二十三日午後三時本立寺に於て本葬を執行せられたり大導師は龍仁僧正代中川日史上人にして原田教區幹事松崎青年會長の吊詞、宗務廳、龍仁、國友、萩原、山岡、大橋、小橋、金光、紀野、渡口、木村義明、有田、京原、秋葉日、成、坪水、今村、坂井、諸師、萩日蓮聖會、大熊、岡山本行寺信徒、深井廣島本照寺惣代、橋本久留米本、泰寺惣代の吊電、並列の諸師には島田、吉永、桔梗、藤下日蓮宗僧侶拾數名及松崎各宗寺院住職會葬者重なる者は森田村長、渡邊青年會々長、其他村有志尙衆集者百餘名にして非常の盛儀なりき、惣て市橋家の厚配に依る、今法總惣代吉永日洋師の歎文は上人通世の略歴を知るを以て之を掲げん。

歎 徳

謹奉勸請法華經本門壽量之本尊愛感納受知見照覽せさせ玉へ

茲に本日を下し當照量山本立寺第二十三世法樹院日弘上人の葬儀を營む、上人は明治十年十二月四日を以て千葉縣長生郡新治村大澤村朝倉弘元の三男として生る、幼にして穎悟佛門に志し、明治二十二年五月十二歳にして同村大澤寺住小高榮部師について剃髮し染衣す、二十九年宮谷大檀林に入り佛典攻究の旁ら東京哲學館に學ぶ、是より先き明治二十八年一月十二日を以て學士補に補せられ、爾來階級進して大正六年一月大學院に昇る。

宗門公人として上人因歴は、明治二十九年八月十九歳にして千葉縣山武郡瑞穂村小中覺行に住職し、初て法燈を紹ぐ、同三十年拾月山日蘇祇師妙蓮寺に轉じ大正六年九月九日當照量山本立寺に再轉するに至る間前後十有七年或は幹事に、布教師に、宗會議員等になり内には堂場の修養、外には布教傳道に力めらる。

上人又身軍籍にありて、明治三十七年征露役起るや衣の袖を絞りに軍に従ふ、其功に依り勳八等白色桐葉章及金百五十圓を賜る。

上人又法と傳次に意を致し、出海後義、富田林惠



子爵 清岡長言選

和歌「夜道」

○天 丹後國加佐郡 廣岡 圓
さすともしゆみはりつきのかけきえて
たとるやみ路そさしかりける

○地 千葉縣東金 萬新舎一止
電の燈の光りひな都

やみお迷はぬ君が御代かな

○人 下谷中根岸 小柳威之允
春の夜半おほる月毛の胸ひきて
我家にいそくあぜのほそ路

○佳 作
遠くもえちかくきえゆく狐火に野中の夜みちゆ
きやわつらふ 下 谷 小柳 英夫
○ひらけ行御代の光りそありがたきやみ夜もしら
ぬ都大路は 福 岡 熊澤 優子
○大空の風より外に光なきやみよの道をたとるさ
びしさ 大 阪 竹内 軌榮

○計らすも長話して隣よりかへる夏道夜は更けに
けり 千葉縣 渡邊 乾航

○夜をこめて野山を越ゆる旅人のあやうけもなき
君かみ代かな 本 所 勝田 宜和

○ふくる夜の里のともし火影さえて行てさひしき
やまのぼた道 千葉縣 林 弘子

○ひとり行やみ夜の道は何となく淋しかりけり志
賀の山越 同 春日よし子

○夜の汽車に立ちます君を見送りて歸り路淋しお
ほる月影 小石川 松尾 圓子

○ゆき暮れて路間ふ人もなき野邊にさやかに匂ふ
梅のはつ花 麻 布 大塚 曉花

○電の車を下りて歸りゆく家路さひしき夜半にも
あるかな 京 都 中野 正甫

○老か身も國のためにはものかはとよるの野みち
も獨りして行 千葉縣 小川 藏司

○母人のいたづききよて深山をもしらでいそぎし
夜のかへり路 小石川 松尾 清明

○入 選
聲高うはなし合つゝ行人を妹が夜路の便りとも
して 大 阪 長尾齋之助

○ゆきくれてさひしきささる古里のまぢかきそら
に月はいてけり 札 幌 法谷きよ子

○親やめるたよりにいそく真かね路も夜あけまつ
まのともかしきかな 下 谷 星野 聖祐

○夕鳥啼にかへる聲過ぎて旅路の夜半は淋しかり
けり 上 總 岡本榮次郎

○あこがるゝ臘月夜にみちゆけはいつくともなく
梅ぞ匂へる 集 鴨 關田 鐵蕉

吉見俊教、坂井英俊、今村俊道、津村俊乘、河村俊祐、及俊夫、新名泰雄の愛第九名を算し其訓陶吾宗門に於て著名の一人也、以て上人が愛法天職の性綱を窺ふに足る一昨大正六年秋當本立寺に轉住し、能く其の使命と天職にはげみ、布教宣傳東西に走り、



大正八年三月十六日荻日遠主義大講演會紀念撮影

- 細野旅團長及び秋田氏ヲ除ク外
- 荻日遠主義研究會員
- 蘭科醫師 櫻井 哲郎
- 實業家 宮木 二郎
- 醫師 河野 武勝
- 陸軍三等軍醫 宮原 晉吾
- 産業家 永井 秀堂
- 高眞師 柳田 恭介
- 實業家 口羽 素介
- 陸軍歩兵大尉 陸軍歩兵中尉 陸軍少將(講師) 陸軍少兵中尉
- 産業家 林 誠丸
- 醫學士 山本 勉彌
- 公吏 三浦宇一
- 醫師 和田 涉
- 陸軍砲兵中佐 陸軍一等軍醫 村田 清熊
- 野北 祐次
- 妙蓮寺住職 紀野 俊耀
- 醫師 世良 捨松
- 第二十一旅團長 陸軍少將(講師) 陸軍少兵中尉
- 法華寺住職 秋田 本定
- 銀行員 藤井又三郎
- 實業家 喜藤 文吉
- 實業家 河村文三郎

其の快活落語日と共に權徳と相親み、地方教團の欣榮當に將來せんとするの時、突如病篤の弱ふ處となり、再び起つ能はず、三月二十日午後十一時四十二歳を以て遷化せらる。

三大秘法事一念三千南無妙法蓮華經
維時大正八年三月二十三日 妙善寺副法 日祥啓白
▲吊 大仙の一角崩れ花雲曳く 鼓 城

●第十五教區布教師巡回講演

- 三月七日明石圓乘寺にて講演會
思想の戰
現代の思潮と日蓮主義
川崎 英照
- 三月九日神戸布教所
日蓮主義の特長
原田 日男
- 外四名
三月十五日草生久成寺にて講演
我宗の信仰
三須 教英
- 本佛の慈愛に接せよ
原田 日男
- 三月十七日土居本興寺にて講演
開會の辭
牧田 英長
- 日蓮主義に對する國民の自覺
原田 日男
- 三月十六日吉ヶ原本經寺にて講演
更賜壽命
三須 教英
- 大本尊の眞言義
原田 日男
- 三月十八日津山布教所に於て
宗教信仰の四大要點
鳥越 勘一
- 日蓮主義とデモクラシー
能仁 一十
- 國民の自重と日蓮主義
原田 日男
- 三月十四日日本成寺婦人會講演
三月十九日岸岸入 講演統一義
原田 日男
- 三月二十二日彼岸中日 信仰の中正
原田 日男

二行雜報

▲櫻花爛漫の 季も過ぎて漸く夏季に入

櫻綠の水盡きなば正に化を變へん
如來の慈悲は三般三菩薩
と温容再び見る能はず、高教再び聽聞の時なし、嗚痛
い哉、世は變り月は移る、如來最高教益日蓮主義渴望
は日と共に時運の流潮たらんとす、教家の任益を重く
遂遂に遠
し、此の
時俄然吾
日弘上人
を失ふ是
れ獨り山
陰教團の
損失たる
のみなら
ず、宗團
の損失更
に何層悲
痛何ぞ堪
んや、今
茲に上人
の體を擲
ひ道俗相
集り誦て
御訣の盛
儀を整ふ
るに當り
呪文を讀
り、教徳
一草以て
如件
南無木門

らんとす一年の盛期也宗教家宜敷可發奮
▲能仁事一師 自岡山來り各處に講演を
開く就中自慶會の工場講話は何れも満足
千葉縣監督 布教は盛を極む佐藤重賢
文學士野澤少將等同行して隨處に講演す
▲東京妙經寺にては五日夜大會あり森
川日修、小笠原丁、野口日主師と共に又
▲能仁師一流 快潤なる講話あり演題は
國民思想の五大要義にて頗る盛大なり
▲千葉青年布 教團は如何茂原道路布教
開演吉見、富田、山田、竹内、河野諸師
▲飯尾寺縁日にて開演布教す山主海老
澤、長岡、竹内出演す是皆二月中の事也
▲丹波大乗寺 は本崎にあり彼岸會廿二
日婦人會廿五日結願木村日順師講話す
▲水戸蓮乘寺 に於て聖祖降誕會を催す
辯士高鍋日統氏なり餘興煙火打撃等あり
▲萩日蓮鑽仰 會細野旅團長を招聘講演
は別掲の如し聽衆二千同市空前の盛會也
▲大阪蓮成寺 同信會例會上田、京藤兩
師出席、十七日管長本多現下講演聽衆充
▲此他丸三商店、彼岸會、郡山、長尾
野阪等にて講話何れも山主上田師出演す
(此の二行雜報裏表紙内面に、つゞく)

- 母と二人夜の町をばかへり來れば是れもとさむく春風のふく 小石川 松尾田鶴子
- 旅はしもくるしき中に嬉しきは臘月夜の花の下みち 靜福縣 佐原 弘風
- 花見んと入にし山に行暮れて月もなき夜の路にまよへり 下谷 小柳 律子
- うはたまの夜みちをたるとさひしきにあゆむ足さへはやくなりけり 三河島 西澤 明花
- おほる夜の月影白く照しけり静かにふくる都大路は 千葉縣 星野 純義
- ふく風に花のほひもおくりきてたとおほるの月の夜のみち 大 阪 池田 貞子
- 小夜中と夜はなりぬらし驛路によほるの聲も聞えさりけり 千葉縣 福島 正之
- 大江山奥の細みちまひしくも夢はかりなる月を見しかな 同 堀江巴詩女
- 宵なから月も朧のうすくもり花のちりしく山の下道 同 堀江得一郎
- さわかしき都の大路もしつまりてたとる夜道に花を匂へる 同 並木うめ子
- ゆくりなくめぐり逢ふこそ嬉しけれ睦がたりしてたとる夜道に 同 醒蘭 榮司
- 小夜ふけてかへる山路も樂しきは櫻の花の匂ふ下かけ 同 柳橋八重子
- かへらむとおもへど花に引かされておもはずふる野への細道 同 笠見 樂也
- 打むれていさ見に行かむ飛鳥山夜路ながらも花のさかりを 東京府 立川 金峰
- うふすなの森の下路夜行けば月に雪とぞ花の散りける 同 金山 猪助

○追加

いなつまのともし火あかき都路は
ふけても人のたえせさりけり
次號「山路躑躅」(やまぢのつゝぢ)
▲課題は本年中のもの總て客年十一月に掲げあり
▲切は必ず月末まで
▲天位當選者には選者の短冊を呈す受取の方は其旨御一報を乞ふ。

「一統」
一統 非句 欄

- 折る人の手つきあやしや鬼窟 某鴨 岡田藏蕉
- 牧場の搾乳散りしあざみ散 筑前 水城生
- 鬼あざみ馬市からの馬の鬣 同 同
- 糞き合子古碑断片や鬼あざみ 同 同
- 開扉に水を探りてあざみ散 青森 惟 泡
- 風に飛ぶ標標冠りて花前 同 同
- 腕に水鞠ふ乞食や花あざみ 同 同
- 糞肥の臭み氣にしてあざみ散 同 同
- 花前田藪つけたる牛の來る 同 同
- 行き會へば片脚は田に崩散 大阪 長尾直水
- 工場の敷地の杭や蒔咲 大阪 山中慶山
- 夕暮に銀の重みや鬼窟 同 同

◎丁稚數名人入用 (至急)

京都市三條通小橋西入
三法堂 藤田總治

日宗法衣專門
青雲帽 帛教服 袴

飯田法衣店

京都市佛具屋町五條北
振替口座大阪四六八七

定價表ハ御申越次第
何時でも御送申上候



佛像佛具 大販賣所
位牌木鉦

宮殿幢幡天蓋一式

●各大御本山御用達
御來店の節は陳列場へ御來車被下度是迄とは一層
勉強仕り莊
數品一式陳
列仕置候



郵税四錢
定價表ハ御一報
次第送呈可仕候
小賣部 京都市三條通小橋東入南側
三法堂佛具陳列場
長距離電話中貳七八參番
振替口座東京貳貳七五九
大阪四貳五九
卸部 京都市三條通小橋西入
本舖 三法堂藤田總治

○童貞は牛と眠りぬ野の菊
○地蔵形の野守の庭や菊咲く
○懐妊の牛が居眠る野の菊
○酒つきてころがる瓢箪や花菊
○廢坑の入口塞ぐ菊かな
○城跡の畫静に咲く菊かな
○殘されて林場へ咲く菊かな
○一輪や挿せば優しき鬼あさみ
○釣人や菊の花を講にて
○草刈の利鎌に残すあさみ散
○菊榮雲英地下なる田打散
○菊咲く傍に唯豆二葉かな
○牛臥せし跡ぞ菊の折れてけり
○草鞋捨つる路傍に咲きし菊散
○堤防に道一條や鬼菊
○鬼菊散らふまての命かな
▲犬茨を城壁として菊かな

新妻と畑に出る門や栢栢咲く
泣く子をは膝す子守や花栢栢
入り日さす二階鼓ゆし花栢栢
牛叱る 藁小屋の後栢栢花
栢栢花に雨霽れて寺の時計鳴る
陽の透ひて池水青し花栢栢
子福者の家や栢栢の花盛り
栢栢咲く一つ家の豊羽蟻飛ぶ
石燈籠の上にごぼれて花栢栢
干した菜の懸懸りあり栢栢咲く
水撒いて栢栢の花に涼みけり
土舞の棟は崩れて栢栢花
誘ひ來し女侍む花栢栢
實約の地坪家内す栢栢花
花栢栢杉垣の家静なり
▲手折には惜し花栢栢木や孫の守

日蓮各宗 寺院 御僧

法衣 草木 直に御聯想下
され候儀に候
京都 三條通烏丸東入ル町
草木本店
電話中七三五番
振替口座東京一五五九番
東京淺草區三好町二番地
草木支店
電話下谷三四三四番
振替口座東京二四五六八番

佛像佛具 調度所
位牌木鉦

宮殿幢天蓋一式

▲普通品定價郵券貳錢封入送呈
總本山妙滿寺
大本山本國寺
日宗各教團
御用達

舊名「乾清」事
大佛師 辻井岩次郎
振替大阪八一五七番
電話下三二五八番
●御用仰せ被下候は、可嗚深切を旨と致候●

○次號課題

「麥」(麥秋)

△本年中の課題は昨年十一月號に掲げあり

○切れ字に就て
▲印生
切れ字に就てお尋ねの某氏に答へます。私の考では切れ字は「や」とか「哉」とか「けり」とか有れば、前、又は後、又は其の切り字に現れたる語句を浮き出す上に力を生む事は申すまでもないとしたならば、勿論有る方が宜いと思ひます。漢詩の「轉」に就て御考へなれば思ひ午に過ぎると思ひます。しかし此の切れ字は必ずしも「や」「哉」「けり」等に限つたわけではなく、文字上切れると見られるものは此以外に澤山ありまじやう。又文字上切れなくても其語句の心に於て切れ、其れでも差支へないわけですが、但し之は破格の格で、元來規則の上の切れ字ではなく、切れ字に於ては句意が増し句格が正されてからの規則ですから、切れ字は句意の境に遺入つてから産れた必然的の約束であると思ひます。所謂切れ字を無視するといふことは無進歩時代への逆轉と存じます。

念珠ならば小野嘉助店へ
日蓮宗各本山御用達
願本法華宗妙滿寺御用達

●御念珠各種
弊店の特色は實用を旨とし從來
調進仕り候へば多少に不拘御用
命願上候

京都市寺町通蛸薬師下ル
念珠 小野嘉助
電話中二六〇八番
振替口座大阪一九七二〇番

布眼藥

效能、たいれ目、かすみ
目、ぼし目、くもり目、
ち目、うち目、つかれ目、はやり目、トラホ
ム等
定價壹瓶、拾錢、廿錢、卅錢、五十錢、八拾
錢、壹圓、

血の藥

定價壹袋、拾錢、貳拾錢
效能、男女ちの道、産前
産後、めまい、たちくらみ、時候あたり、氣
絶、のみすぎ、酒毒、婦人病、貧血疾、風邪、
千葉縣山武郡源村上布田參百番地
藥王寺

布眼藥 本舖 齋藤日章

(御注文は總へて下記振替に)
(振替東京第六七九一番)

本多日生師著

大藏經要義

菊版洋裝上製
三方金綴函入
每冊四百頁以上
既刊自一卷至十卷
各冊貳圓四拾錢
送料各十二錢

◎日蓮主義綱要

本多日生師著
正價壹圓六拾錢
送料八錢

◎日蓮聖人正傳

四六版美本
正價壹圓拾錢
送料共

◎日蓮主義の運用

九拾五錢 送料六錢

◎日蓮聖人の感激

前同斷

◎修養と日蓮主義

前同斷

◎國民道德と日蓮主義

壹圓貳拾錢送料八錢

◎人と教

八拾錢 送料共

碧瑠璃園著

日蓮聖人

右取次販賣

東京小石川區白山前町一七

統一編輯所

振替東京三三五三三番



(號一十九百二第)

東宮廸宮裕仁親王殿下御成年、本月吉辰を卜して加冠の大典を挙げさせ給ふ(四月二十九日の御誕辰をもて御製式のところ、竹田の七日をもて吉日と定め給ふ)億兆内外の臣民孰れか瞻仰し欣忭せざるべき。殿下仁慈聰明、而して英邁の御天質は、明治天皇に承け給ひ、寛宏の御美性は、今上陛下に嗣がせ給ふ。令聞夙に中外に布き、民望率土に普くましますこと良に以あらる也。神國麗玉の本質この皇儲のおわしまして更に耀き彌らんことの愷こし。夫れ吾曹は土に一王、教に一佛のみを知り而も王佛一根の因縁を信ずるものにて、之を法國冥合と稱へ來れり斯土は最勝國の大日本にして教は最尊の法華經を指す。最後世界の太平和大愉快は斯の教と國との義理徹底する事に於ての時に決するものなる由を確信す。この信念に住する吾曹、今最勝王國に未來の帝位を嗣ぎ給ふ。殿下の御加冠の日を拜して勇躍歡喜に堪へず、輒ち赤誠を披瀝し謹て祝意を表し奉る。

所輯編一統町前山白川石小京東 所扱取務事行發
▶番三三五三三京東座口替振◀

心の鏡
日蓮聖人教義綱要 大僧正
デモクラシーと佛教と國體 僧正

山松井本
根尾村多
青鼓日生
村城咸生

登山僧と意義
趣味餘滴
和歌課題山路躑躅

讀者月旦
清岡長言選

前田日應

大僧正村雲日榮尼公御題字
法學博士志田鉦太郎氏序文
日蓮宗 北尾日大先生著
大學教授

俗通日蓮聖人の教義

四六版全一冊 總振假名付四百餘頁 布製金文字入美本
正價金一圓五十錢 送料金八錢

我國思想界の最高權威たる日蓮聖人の宗教の各方面を縱横に説破して遺憾なからしめたるもの本書以外他に類無しといふべし。戦後に於ける最勝思想を修養せんと欲する國民は須らく必讀せざるべからず
小川泰堂著

日蓮大士眞實傳

佐藤海軍中將序文
上村海軍大將題字
宇都宮主計之介口演
正價七十錢 送料六錢

日蓮聖人御傳統一節

正價一圓二十錢 送料八錢

店書寺樂平 所行發

▲本誌事務取扱所東京市小石川區白山前町統一編輯所(▲本誌定價一冊)發行所東京市淺草區北清島町十四番地編輯兼發行人松尾英四郎△印刷人鈴木日雄(十錢郵稅五厘▼)